

ー クラブライフが心とからだと暮らしを変えるー

「元気なとやま」をつくるためスポーツクラブによる生き生きとした暮らしを提案します。

日本におけるスポーツの大切さを伝え、サポートしていきます。



NPO法人富山スポーツコミュニケーションズ

巻頭インタビュー Interview

プロ野球独立リーグ「BCリーグ」は4月19日、2年目が開幕する。富山サンダーバーズは、昨年逃した優勝と、スタジアムを満員にすることを目指し、「奪取!」をスローガンに掲げた。3月1日、魚津桃山でチームは始動。「雷鳥応援団」のメンバーら熱心なファンが選手を見守った。永森茂社長に初年度を振り返ってもらい、今年の目標を聞いた。

富山サンダーバーズベースボールクラブ・永森茂社長に聞く

元気づける力 確信

永 森 茂

■1年目は残り2試合まで優勝を争っての2位。ホーム36試合では延べ7万2175人(1試合平均2005人)の観客を集めた。成果をどう捉えていますか?

「自分たちのチーム」と思って応援してくれる熱心なファンを数多く得ることができた。魚津桃山球場での最終戦が印象深い。前日に石川の優勝が決まって消化試合、平日の夜でもあった。悪条件が重なったにもかかわらず、1182人の観客が集まってくれた。試合後には「1年間、楽しませてもらった。ありがとう」と感謝の言葉までいただいた。チームと選手が、人の心になにかを訴え、元気づけることができたと感じた。

「野球を通じて地域をどう活性化できるのだろう?」と自問自答しながらのシーズンだったが、目指すべき方向性がみえた気がした。支えていただいた皆さんのためにも、チームをさらに根付かせていかねばならないと決意を新たにした。

最後まで優勝を争うことができ、ファンに喜んでもらえたと思う。選手の技術もすごく伸びた。選手兼コーチとしてチームを引っ張った宮地克彦さんが、育成コーチとしてNPB(日本プロ野球機構)のソフトバンク・ホークスに復帰できたことも収穫だ。

■経営面の課題と今年の目標を聞かせてください?

初年度収支は赤字。試合運営やスポンサー集めなどすべてが手探りで、シーズン中に改善しながらやってきた。経営安定に向けて今年が勝負だ。観客増とコスト削減に取り組み、黒字化を目指す。

ホームゲームの観客は1試合平均3000人が目標。前年のデータに基づき、観客の多かった球場での開催を増やした。ファンサービスとして、メールでの情報配信(※登録はi-9dzfd9fv@g.blayn.jpに空メールを送信)を開始した。

4月20日にホーム開幕戦

2年目のBCリーグは4月19日開幕。富山サンダーバーズのホーム初戦は20日、宿敵・石川を迎えて富山市民球場で13時から行う。今季のチームスローガンは、「奪取!~魅せろイナズマ魂~」。群馬と福井を加えた6チームが各72試合を行い、北陸・上信越の2地区、前期・後期制で競う。10月に地区プレーオフ、リーグチャンピオンシップがあり、優勝チームを決める。



SHIGERU NAGAMORI

昭和30年生まれ、53歳。
高岡市在住。商社勤務を
経て、平成6年ITコンテンツ
制作会社「メディアapro」を
設立。
平成18年富山サンダーバーズ
社長就任。
高岡野球協会事務局次長
なども務めた。

シーズン中には、先発メンバーや試合結果の速報にも活用する予定だ。群馬と福井が新規参入し、6球団が前期・後期制で戦う。リーグ戦のヤマ場が増え、集客につながると期待している。チームの後援会には昨年、100法人1000人に加入していただいたが、さらに増やしていきたい。

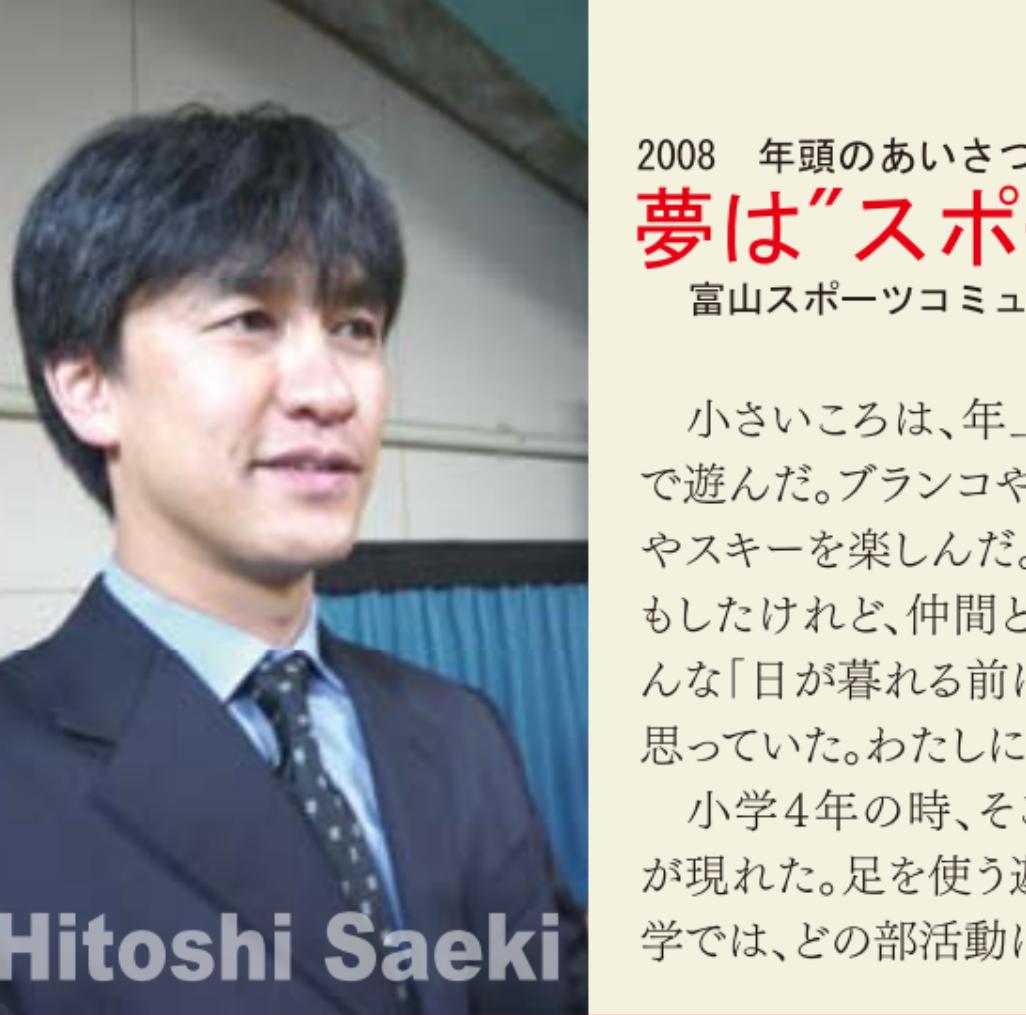
■野球教室の開催やイベント参加などで地域貢献に努めてこられました。新しい計画を教えてください。

地球温暖化防止が社会的テーマになっており、エコロジー推進に積極的に協力したい。球場での飲み物販売にマイカップを導入するなどして、ごみの減量化に努める。公共交通の利用なども呼び掛け、キャンペーンのシンボル的な役割を果たしたい。

明るい話題を提供できるよう「野球を一生懸命やる」ことが原点。球団が増えて競争は激しくなるが、昨年逃した優勝をつかみ、ファンが胸を張れる成績を残したい。技術はNPBにかなわなくとも、「夢を追い、ひた向きに取り組む姿勢」を見ていただき、「応援してやりたい」と思ってもらえるチームを目指していく。

■Jリーグ入りを目指すカターレ富山が発足しました。バスケットボールの富山グラウジーズを含めどう協力していく予定ですか?

スポーツを富山の文化として定着させるためには3チームの連携が必要。さまざまなノウハウを共有化することも可能だろう。共通観戦パスの発売、スポーツを支える基金の募集など、相乗効果を得られる事業を考えていきたい。



2008 年頭のあいさつ 夢は”スポーツのある街”

富山スポーツコミュニケーションズ
理事長 佐伯仁史

小さいころは、年上や年下に交じりひたすら外で遊んだ。ブランコや木登り、夏は野球、冬は卓球やスキーを楽しんだ。いたずらして怒られ、けんかもしたけれど、仲間と一緒にいるだけで楽しく、みんな「日が暮れる前に家に帰るなんてできない」と思っていた。わたしにとって夢のような時代だった。

小学4年の時、そこに「少年サッカー」なるものが現れた。足を使う遊びは珍しく、面白かった。中学では、どの部活動に入るか相当悩んだ。「全部

やりたいのに、なぜ一つしかできないのだろう?変なことするなあ」と素朴に思った。そして、一番奥が深そうに感じたサッカーを選んだ。

大学に進学する時には、スポーツは人間にとつて不可欠な存在であると悟った気になり、迷わず体育学系へ。そこでは「スポーツ」が「運動(体育)」=試合観戦もしない」という流れができ、スポーツコミュニケーションは「運動が得意な人」で占められるようになっていたと脳をよぎった「ひらめき」や「気づき」が夢となった。幼いころの遊びも、スポーツの原点に通じていたと気づいた。スポーツの価値を広げねばという志を抱き富山に戻った。

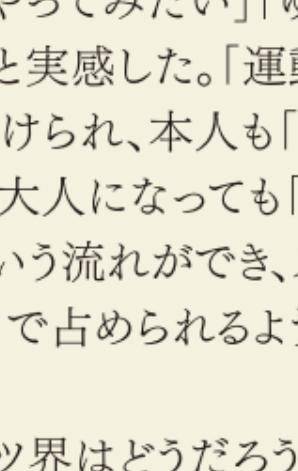
試合結果に关心が偏り、「運動」が得意な人ばかりにスポットライトが当たることには以前から違

和感があった。教職に就き、学校では「運動が得意な子」に活躍の場がある、「ちょっとやってみたい」「ゆっくり見ていたい」という次々と誕生した。そして、スタジアムやアリーナで試合観戦を楽しむ県生徒には機会が乏しいと実感した。「運動しない子=スポー

ツの苦手な子」と決めつけられ、本人も「スポーツはできない」と思い込む。それが、大人になっても「スポーツが苦手=試合観戦もしない」という流れができ、スポーツコミュニケーションは「運動が得意な人」で占められるようになっていたといいを大切にするためにも、プロクラブの運営会社には大きな期待がかかる。わたしたちも県民の一員として支えていきたい。

しかし、最近のスポーツ界はどうだろう。プロ野球と肩を並べたJリーグ、サポーターなるものの出現。スポーツが、「する人」だけでなく、「みる人」「話す人」「支える人」「働く人」を巻き込み、本来

「世代を超えて多くの仲間が外で遊ぶ(スポーツをする)ことが当たり前の「楽しさ」や「仲間(Good Fellow)づくり」の力を發揮し始めている」となる豊かな街をもう一度、この目で見とどけるようにみえる。富山にも、bjリーグ「グラウジーズ」、北信越BCリーグ



佐伯仁史 理事長

富山スポーツコミュニケーションズ

理事長 佐伯仁史

富山市立第一中学校

富山市立第一高等学校

bjリーグ観戦ナビ 始めました！

ON AIR!



小型レシーバーによる観戦視点をサービス。

「富山グラウジーズ観戦ナビゲーション」を1月から始めました。試合会場で希望された方を対象に、小型トランシーバーを使ってルールや戦術の解説を行っています。

ナビゲーター(解説者)は、県内のバスケットボール指導者に務めていただいている。初步的なルール解説から、「今のプレーにはどんな意図があったのか?」といった専門的な説明まで、試合を楽しむポイントを伝えます。バスケの奥深さを知っていただき、スポーツ観戦の魅力をより強く感じてもらえばと考えています。

地域のバスケ関係者にも協力いただき、30台ある受信機は毎回ほぼすべてを貸し出しています。4月6日まで、ホームゲームで実施します。

スポーツは「する」だけでなく、「見る」や「知る」楽しみ、観客も選手と一緒にして「判断する」という楽しみ方もあります。生観戦の楽しさを伝え、アリーナやスタジアムに足を運ぶ人が増えることがTSCの願いです。

今後、野球BCリーグの富山サンダーバーズ、サッカーのカターレ富山をはじめ、ほかの競技でも試みたいと考えています。

*運営ボランティアスタッフやナビゲーション実施を希望する大会も募集しています。

グラウジーズ オフィシャルホームページにも掲載されています。

<http://www.bj-gr.jp/index.html>

KATALLER TOYAMA

夢の実現へともに行こう

待望のJリーグ準加盟クラブ「カターレ富山」が誕生しました。J2昇格をかけ、3月16日に開幕する日本フットボールリーグ（JFL）を戦います。

「アローズ北陸」「YKK AP」の合流による県民クラブの発足—昨年9月10日の電撃記者会見から、チーム名の発表、楚輪博監督の就任、選手28人の決定と準備が進み、2月19日にJリーグ準加盟が承認されました。

クラブは「青少年の健全育成やスポーツの振興、地域の活性化などに貢献し、ふるさと富山が一層元気になることを目指す」との方針を掲げ、運営会社には県内の主要25企業が出資。ファンクラブには、2月の募集開始から1カ月で5000人以上が入会しました。期待感は高まる。

Jリーグ入りへの条件は、ライバルひしめくJFLでの4位以内と、ホーム17試合平均3000人以上の観客数。ハードルは低くはありませんが、選手にも、わたしたちにも、しっかりと見据えることができます。

「わたしたちの街にJクラブを」想い続けてきた夢の実現に向かって、長いリーグ戦とともに歩きましょう。

カターレ富山開幕戦

3月16日 PM1:00 キックオフ
富山県総合運動公園陸上競技場

VS ニューウェーブ北九州（福岡）



赤いスタジアムで思う —Jリーグ観戦ツアー報告—

富山スポーツコミュニケーションズ
理 事 大井洋平

Jリーグ観戦ツアーを始めて2年。観戦する試合は、浦和レッズとアルビレックス新潟を中心に組んでいます。ツアーの目的のひとつが、満員のスタジアムの雰囲気を味わうことにあるからです。

この両チームは、Jリーグで1、2位の観客動員を記録しています(07年リーグ1試合平均=浦和46,667人、新潟38,276人)。特に浦和は昨年、地元開催試合の観客総数が100万人を記録し、先のアジアサッカーカークラブNo1を決めるアジアチャンピオンズリーグで日本勢として初優勝。名実ともにアジアの浦和、そして世界の浦和へと駆け上がりがとうとしています。昨年11月24日にツアーで観戦した浦和—鹿島戦の観客数は62,123人。124,246の瞳がこの試合を見ていたことになります。

浦和の凄さはここまで短期間にJリーグの理念である「Jリーグ百年構想」を、実践しつつあるということです。百年構想では、誰でも気軽にスポーツを楽しめる豊かなスポーツ文化の定着を目指しています。浦和レッズのサポーターは、浦和レッズを応援することを生きがいとし、ともに歩み、そして浦和レッズというチームの存在が、彼らのアイデンティティーともなっています。

各クラブも浦和のようになろうと日々努力していますが、現実は簡単なものではありません。Jリーグ設立当初、日本代表選手を数多く抱え



数々の栄光を手にしたヴェルディ川崎(現東京ヴェルディ1969)、鹿島アントラーズなどは現在、観客数がピーク時の半分近くか、それ以下となり集客力の低下が顕著です。さらにJリーグ1部から2部に降格したチームも集客力は低下傾向にあります。地域密着を実践しているJリーグクラブでさえ苦戦している状況です。

富山県にもJリーグを目指す県民チーム「カターレ富山」が誕生しました。何のために今この県民チームが必要なのか?そして県民チームの目的は?Jリーグに上がるということだけが目的ではないはずです。新チームにまず求められるのは県民との距離をもっと縮めることだと思います。

浦和が真のサポーターによるチームである象徴は、試合前のカラーボードを利用した絵文字です。私設サポーターが試合前、観客に絵文字への協力を呼びかけている姿を見て、「これが真のチームなんだ」と確信しました。カターレ富山でも、一日も早くこのような姿を見たいと願っています。



Mission Vision

TSCのミッション

「クラブライフが心からだと暮らしを変える」をモットーに、「する・見る・話す・働く・支える」の喜びを感じることができ、自ら楽しみ、夢を育むことに貢献します。

TSCのビジョン

■Jリーグクラブつくりを地域クラブの立場から支援することによって、子供から大人まで県民に夢と感動を与えます。

夢を語れる子供、若年層・高齢層との交流の場を増やすため、クラブライフによる喜びをJリーグクラブ設立にも反映させ、県民全体の一体感を感じることによって、地域社会や家族間での共通話題を増やし、全世代に夢を育みます。

■スポーツによって「元気とやま」を創造し、富山県を大きくアピールします。

富山の知名度を上げるため、スポーツ選手の育成やJリーグクラブ設立に寄

与するとともに「元気で健康なとやま」のイメージを全国に伝えます。県内で人材を育て活用することで全国的・世界的なニュースを発信します。

■生きかいのある高齢社会や青少年がのびのびと育つ環境を提供します。

中・高齢者への生きがいと健康の推進に寄与します。また核家族化がすすむ中、異年齢集団での交流を増やし、子供の心身の教育に寄与します。そして青少年が身近に「夢」を持ってスポーツ活動に取り組むことを可能にし、支えあいながら克服する素晴らしい姿を体感できるようにします。

■スポーツ文化の高揚に寄与します。

誰もが気軽にスポーツクラブを楽しめるよう地域住民の手でつくりあげることによってスポーツを常に携帯し、クラブライフを生活の一部とすることが可能となります。

■豊かな地域コミュニティの形成を図ります。

様々なスポーツコミュニティを形成することによって、県民の心地良いコミュニケーション活動の場、情報発信源として地域を活性化します。

◀2007年度 スポンサー新年会開催▶ 平成20年2月1日（金） 場所：癒酒屋「太陽の島」



今年度、様々な事業展開ができたのは
スポンサーの皆様のおかげです。

感謝の意をこめて新年会を開催さ
せていただきました。スポーツならでは
のコミュニケーションを楽しんでいた
だき、嬉しく思いました。来年度も心強
い支援の輪を、広く進めていきたいと
思います。

INFORMATION

- ◆JFAスポーツマネージャーズカレッジ富山県サテライト講座
3月1日～23日(6日間) 18名受講中
- ◆第8回Jリーグ観戦ツアー
3月15日(土) 浦和レッズ VS 名古屋グランパスエイト
14:00キックオフ(埼玉スタジアム)
- ◆TSC総会
3月29日(土) 富山県民会館 16:00～

開設コース案内

サッカーを知ろう！

* サッカーとは何か？勉強会を開いて豊富な知識を学んでいます。
JFLは観戦無料！Jリーグ観戦ツアーなどのスポーツ観戦も割引になります。

パワーヨガ教室好評募集中！

* 癒しながら健康的にボディコントロールできます。



U-18スクール募集中！

* FC富山U18チームとして富山県U18リーグ戦にも
参加できます。中学生のトレーニングの場としても活躍中！



参加申込：氏名・電話番号・参加希望コースを添え直接TSCへお申ください。
携帯090-5176-0075 TEL/FAX 439-9277

編集後記

大リーグのレッドソックスが、86年ぶりにワールドチャンピオンになった2004年秋。地元ボストンでは墓地に花束があふれた。ファンだった祖父や父、亡き家族に優勝を報告する市民が大勢いたからだという。

新聞記事で知ったお気に入りのエピソードです。100年たっても、200年たっても、人に必要とされ、愛され続ける。そんなスポーツと、チームが富山に育ちますように！



事務局

〒930-0818 富山市奥田町 12-41-203

Tel.Fax.076-439-9277

E-mail (pc) hi104fc@mbm.nifty.com

URL <http://www.toyama-sc.net>

Vol.4 発行日：2008年3月1日
[発行日] 年3回（11月・3月・7月）
[発行] NPO法人富山スポーツコミュニケーションズ
[発行人] 佐伯仁史
[編集人] 赤壁逸朗
グラフライフが心とからだと暮らしを変える